



杜野  
 関谷  
 涼袋  
 延喜寺卯年

中村俊定文庫  
 文庫 18  
 295





竹  
枯  
竹  
竹

中村俊定文庫  
文庫 18  
295



玄居之百格集 之介亮

東氏

入博之因



水口



序

涼葉は秋の贈り草稿

ぬい糸か賀より伊勢大和乃

風雅うううお洛東都北

情抱

病之体のほれくま

ううう竹々

延享丁卯冬

中山百梅





丙寅紀行

・ 飯お辞

希同

却用報伊去年のミウ花梅の花  
咲以身ん和菜中に木とむく  
起ては卯山の香さけし脚  
海川の月影やねあくるもに  
あまふれりト他亦さる海草の風  
たふくれ多二尺のくにあむえと

麻のたりのちをれやすくて川とむ  
くもあつねにゆく道芝に席を敷け  
合飲はやく明かに杯を結ぶ

暮柳舎るあ

涼とあつくゆく水マ柳舟 却用

松任乃里ちちよ女と同ふ川推乃好ふ  
いまさる云り市中に卯人の春  
でたれさるを感

傑く争位やハ好く ね烟



何あいきり

松を吹くあまきの風ははる近

伊勢の浪を

今昔もほこりの故情を草花

管に定乃及なふあ

秋同鼓

秋同鼓 秋同鼓

静くも秋の志くれやまの雪

秋同鼓 秋同鼓

夕の欲のちよあはるあう

煙にあつと床はーら

お食も月の月おと何とやん

浦の形くいほり舟

あけと柳のそれ又うら

おるさへあつと風吹ら

ほくすくと琵琶のほろ解

鐘の流く酒蓋のざれ

路

同

玉

叟

路

同

芦叟

秋至

秋同

栞路

杜菱

秋同



かきとされ 油燭ハみとひく  
穴、ちつ弟とるくひく  
元くふおその腋とちのち  
草のけきハ録倉の 耻  
徇妻いそけく明く月落く  
字の大工れえ何く  
おの陰茶くも持くたきにえ  
枕よりたぶとけさく

豊 踏 同 玉 絡 同 豊 玉

ちほのえと春のうちにユマ  
土賣ちと妹お子と泣お  
船とア白くおうのよと交リ  
斗舞のるに花と通く  
蚊くふくね流くア  
洞の枝おとあけく刺刀  
あくく脈つつけく習せ  
字く何くくれあハ小便

絡 同 絡 同 豊 玉 絡 同 豊 玉



はれの可く糸瓜はむし秋の末  
 二二二ハミテハ断琴のね  
 月の支壁くそ夏の照く君  
 ノハハけく追ふち乃ぬす人  
 とう陽あゝ柑が底も可相子な  
 味噌の赤ー衣にまきハ流れぬ  
 たるやくにはちこのあゝゆふくま  
 あま長好ハ昼々あかつき  
 豊 同 路 小 路 雙 同 玉

けて明くえれくもあのみくも  
 けりまうーは生みーく赤  
 同 路

七尋魚

赤糸のまに信とくく  
 いやくり頂陀をあらはし

二体くはくはむハありー麻の角  
 一文通  
 同 路

富寺の青ヤハあゝりまの秋  
 石 路



草やほろゝいかにあしめ  
百物

卯のふれ雪に持ちし  
お鯉

アゆと踏しう鹿地とあしめ

おけつされあしめしき

古山亭うやま

後そや榎木のどゆる上庵ちり  
お同

挨拶

月の舟早うけり僧りり  
古山

四季長雜

金屏もてわハくりは社丹々  
史州

温後會まつまよアハ告し  
仙臺

すけうちふ山のあしほし  
堺南

日の陰木山に倒ありかんこ  
洛果

侍のあし樹ハ寺しおほら月  
六梯

ゆす人とこをくほああり女寺む  
南有

けそくしスるみアうあつ  
葵亭

煙木のむかとう治めほろ  
栞人



宇山とあるむくみア丁のあ  
 余の種くかき腹もある 瓢弁  
 字の指くあともくあやるさの秋  
 葉ア香ハいよあ 荷くたく  
 多筆はあちくくくマ夏木立  
 ちあもあくくむあうあはる月  
 川波と足くくすあア文のあ  
 陸くくことつてもあ、瓢く即  
 豊竹  
 乙塚  
 寺前  
 去路  
 孝文  
 寸豆  
 暗帳  
 胡奴

子進の尾に吹あけれ一葉新  
 鞘あもたういゝあひす首あ  
 かくれああのを目にあるや柳のむ  
 川波の音吹下りあ一葉ふあ  
 山姥の謡くめらさくくあ  
 笛むやゆきまの風のくに吹  
 川くまあああの細ア持のあ  
 遠のうに葉と流上あを吹  
 東取  
 道晴  
 花お  
 魚角  
 茶柳  
 すう女  
 其則  
 不答



諸島まゝあゝ松くさまのや  
戸窓の底けといふおき  
けし合に鳴らぬや新み  
丁回  
三枚  
白山

文通

聖霊の目くつ十万  
一多ははのまれら  
山伏のまもみふちを  
まほくしや永におあれ  
善国  
百川  
百枚  
何枚

はの国い其尾の海んいと海なる

司野々旅亭ト余

あゝと製もやちの中乃  
ほとさね流りや  
上麻の音  
吹れて海へ織こし  
けろ又神あ  
杜夢  
お用  
司野  
林根

妻原神岡の二  
や



水仙の明早にたそし松

歌同

ゆく先くふゆはちのち

梅路

那日鼓の雅全梅路作とそくい

鯉奥の寸心と穿とそく

文星に用れ風口そあふま

百梅

隣乃春と同一梅香

梅路

足両りう羽根のあふそとふ合ふ

歌同

汁口伊賀の山紙

梅ハマ山路吹れを合お

歌同

丁卯去文通

路次あけく梅を通すや去のふ

百梅

丁めいやくく田路やすむ燕舟

二玉ら草むすいあり心さへ

呈於周師玄

善言志

中仙金律くそ陳丁るあつく希用

後文の玄紙くとりやさく仲路の風友



くれつめになつちあつて今おけす者  
 又たあつたわうち山あり洛し百川あり  
 能くくに司野有といぬけ三子又ゆと云  
 我や百梅再振いいむ世う可雅  
 能くつゝ食小者ありい道と説く敬者  
 あうあつた侍とむすう距離する者あり  
 凡て三流地う投うとへうにま雅と  
 可く所着ちう何はけりう友あり人

此春秋のほれい感うく物うやうくすの  
 あううれうく我うまうくま北うまうま  
 あのを七五のねんみさうハ鴉の畑に叫び  
 蚯蚓の塵坂うあやうまうまの俳諧  
 ハ師うあうんかく云う録とあまうん  
 仰ううけけハ鳥虫のううさうのあ  
 ありんう人ハいさ長うう四霊のうう  
 ホうう母れハまうういうれあううあうん



十  
ひくゆらあろくめ。春よ似く笑くねと  
雅しくせんく。養殿も学識も人なり。此  
程高と出頭く。こにたのみと極れと  
やめり。他諸の用とよめり。あふにたれ  
おし。られく。いなる。賞とよめり。ふの片ふ  
ち。お。杯ハ。凡雅と。集ん。く。四民。乃  
産と。人。倫の。有。え。ふ。ハ。凡雅と。道と  
せん。く。聖の。朽。一と。保。り。人。く。秋。と

凡雅く。院。職。せん。く。儀。ハ。今。日。の。首。命。と  
り。雅と。学ん。く。ほ。く。た。と。金。盾  
の。ほ。る。こ。く。あ。く。眼。医。有。と。呼。に。り。て  
さ。く。い。の。三。は。の。使。い。先。に。論。や。る。身。虫  
く。一。任。り。く。莫。逆。唯。青。山。を。や。く。世。上。に  
白。眼。す。く。い。り。む。れ。ハ。其。内。く。署。を。一。人  
く。鳳。字。と。よ。め。こ。顔。と。あ。く。や  
師。の。凡。雅。に。あ。り。天。下。に。席。を。割。り

士







はるのるるいかにふしうに和らぎ  
人のたのみとあれあつこころのほろ  
きつねく秋はまのくちくは思ふあつこ  
りとうままをどけするこ持佛に  
あさつて佳れあつこを同あつて語ら  
つるにこころは佛の心傳うての志に  
ふふんとそとちのむるこころの穴に

丁卯仲春

せらにまうてうかりらく春の糸  
む借養未雨の志は海うらうらう  
ささるのまは洛うのほくハ仙のやと  
おのころ芽甲にむえはの集とさち  
むちうとと葉にむりは「頂」あつこ  
所りいむむつりに百極うおとつれい  
さくはうんて東中うゆんといほまや  
あつこの思手強は説くまんとちくさち



終るる似ししり節に病と進めし  
けららみとアヤリヤとあむ

くらひすにほあ子あり夜木立 秋同

送秋園物僧辞 七友湖樓

去るの丙寅の秋乃にけり相称し

鈴虫此のを鳴ししと夏湖樓と庵

此とあむかられしは海にありぬ

眼と會ししと茅序に後情と

あうしと大和の風推のうらむく

りしと空容縁のうらむくははしと

い中再會と鄭しあむ人とあむ

茅野をうつせれむの中宿とよむれ

多斗等のふしとれれ倉橋とらり

と席をりかけしあのかけ時の吟と

くくつ詩水もそとにあつ居し

人のあをわむるし





貞和

八徳真人寫

貞和

ほくふにりふハ枝杖の立枝より  
存山

蔭くむすふ上庵もサーラ振  
如周

盆乃 苜蓿く一糸を尺をゆるく  
東里

はねすらるす此多い人ちる  
之枝

むしろもの朝の夕々下てねき  
鐸角

草乃 蔭あく川子ほすや  
左近

野の目とお汁の凍つたねき  
在栴

茶うたよさあく菓子のか  
丁固

廿五



ひいころの口次くちもすきさあり  
 山ふきの巻まきもおむ題目  
 おいひのおへ遠い伊達とく  
 ねくくおも通さく行れ  
 おりらアおぬくく較くらをすめれ  
 世も小あより雪の降おハ  
 かくさきも輔すけもくくはらまき  
 国乃便々巡れく本お  
 胡科  
 暗帳  
 史明  
 仙臺  
 文車  
 孝文  
 玄工  
 秀才

月去らハあくれと花の口ハくれき  
 志まぬ上麻乃ぬとらよ草  
 幼女ゆひのふくく長夕のぬくひる  
 清くくくく夏く酒のむ  
 子くくゆよぬくもくく舟のまゆく  
 くと此口救め足くぬおあし  
 笠右折もすくひる伊豫のちまとの  
 丁の骨おれハ法成投おき  
 南有  
 寸豆  
 豊州  
 六枚  
 阿城  
 鹿角  
 乙蝶  
 赤笛



中ふぬと嘆くくちのぬりみ 去路

垣んくゆけとるよも戸の 右取

分貝学れあふぬと何ふふり 過来

とふぬも夕もすくふ地丁 樹人

ちくちきま柳に秋とてきま 催む

笠のどんほいりす高入 傭戸

つくりりおぬく橋り幸まれ 道晴

さちアすの目とあつく森て 三千照

糞れ々唐の種よのれくゆく 千里

と守ル神風やの正面 岐歩

ゆれぬとけいふれは子多 百川<sup>帝</sup>

ほけくあおおし宿うくれ 俗児

おのくほくまきの 送ふあう里

五月のけいあハ仙観う付ひく  
又遠坂の奥こゆれちくかくれハ  
ゆれぬ人く通うし

こちむく教うし 捜あぬ清うハ 百川



武家東馬車

七

よほくの重きくし迫り雲糸 以用

孤涼

高園より扇乃にといふくき糸 砧上

十—きや四よゆくぬれ楳の乳 百物

お山より留おありし七糸のきく糸ハ  
まばらのむくきくきくぬれ高軒此  
るくま四くきくきくんきくきく  
伊路と驚くしや

麻州より伝はやふれも旅了らし 百物

花とよれし梅とくむ時 却用

あ方へ給仕の建ふ旅くちりや

つまんく梅あお空の塵 梅

月あらしはほく毛尺のちふ成

角力ゆりせば皆肥てきたる 田

鳩ばく津くはつれく津梨き

木のりきお乃おぬるる 梅



伴先以草人形くあおふし  
 梅磨行つゝ肩はあつら  
 物陰く基のぬらぬちとあ  
 雲とぬらぬちとあ  
 みくおし聖の眠る月ハる  
 ちつゝおぬらぬちとあ  
 とやけおぬらぬちとあ  
 二口おすくに口はけしり

同 梅 同 梅 同 梅 同 梅

咽とわくわく音のあつら  
 理のくを踏んくこぬく  
 けつてまの赤く火吹し働ひ  
 いまれとゆくに午あはるに  
 思路のあいの土山するあし  
 早松を秋くつむまき  
 強香のたぐ送るあ、ちの産  
 ちとてわるるる表具を同

同 梅 同 梅 同 梅 同 梅

十九



いそ〜の茶漬ハ鼻とわけ〜ゆ  
 捨棄のたろとろよあ〜味珍  
 た〜ちあ揃〜伊達所はあ〜う  
 あ〜えんア〜おれ〜ら〜  
 乙月七富士〜ちれハ冬〜似〜  
 尾む〜お〜お〜り〜り〜ゆ〜時  
 物草あれけ〜たれ人〜も〜簾破  
 又あみ〜さと〜く〜わ〜く〜物南  
 用 栴 用 栴 用 栴 用 栴

ひよさ〜ゆ〜煙 笈 ぶくのう〜返る〜  
 ぬれ〜も〜た〜と〜い〜ま〜あ〜ゆ〜  
 松竹〜け〜ら〜集〜い〜ば〜焚〜い〜窓のあ  
 あ〜の〜ろ〜く〜い〜す〜外 入 中 三 味  
 ぶ〜の〜心〜よ〜の〜は〜と〜り〜い〜ね〜あ  
 一〜の〜の〜名〜や〜は〜ち〜れ〜く〜ま〜の〜む  
 つ〜い〜れ〜は〜一〜事〜の〜り〜や〜心〜よ〜の〜ふ  
 新話〜との〜や〜く〜ま〜く〜や〜ま〜れ〜ど  
 栴 用 栴 用 栴 用 栴 用 栴  
 栴 用 栴 用 栴 用 栴 用 栴



百折とくはさして金糸のたはらひをいす  
吸露菴の額とくくむらぬ門のおうま  
尺竹てふけ地をうんま涼徳の名と  
よしとせん

あけけ毛信はきあまあま  
えくくつつかくく定や糸の月  
涼徳  
百梅

偶作

あまらまのぬすれ柳の卯  
定や卯のひくくあやけの梅  
あま  
田代

稲刈一決へ進めんとぬす  
すきききききききききき  
中法おきてあまあまあま  
梅の針目くくあやけの梅  
くくくくくくくくくくく  
あけの梅や穿てつるあまの  
よまらまの源氏のあまあま  
あまあまのあまあま

不三  
あま  
あま  
伊心  
豊田  
白雪  
舊桂  
十家



よこ女のよをひりくち 踊る卯

桐原

茶のむや香ハ美まうして行かよ

李趙

庭門の香もくくや 桐のむ

林水

新幕の一日 舞あすねん

南壽

松より一ふ枝もあ芽や 舞あ

楚宅

まゝ魚も 舞をみくくや 舞あ月

露符

ゆく丁口又 送あ月ハまゝ 舞し  
まゝのふとや 舞あ

里曉  
芙蓉

山又よと 舞く 舞あや 舞あ

乙女

新坊も 舞く 寺れ 田ハ 舞

秋午

あまれ 舞たく 通き 小舟 舞

和鳴

川 舞く 舞れハ 舞し 寺の 舞

三楚

よあ 舞に 一 舞く 舞あ 舞の 舞

冠子

や 舞 舞き 舞 舞 舞の 舞 舞 舞

祭車

舞あ 舞の 舞 舞あ 舞 舞の 舞 舞

舞何

舞あ 舞く 舞の 舞 舞く 舞く

舞圓







春に春儀にあつて四雑うらみ  
おのこれほありとてれむつうりは  
誰くてもありひ合せぬや女の未だ人  
予も世にあらう病床より他後やう時  
ふやすひうけしね枝野のうれぬ境  
をふたれはよき翁ハ能聖にすむハハ  
もめくふく枝も又枝野にありとて  
ちまて女のけしとて詩に向ふ

「命今果夢中の説いさしちれ枝野乃  
一夕と會すや梅吾友にあと所野に  
道あり跡あれハやうとハふれり  
ハるやうけわらふ可くは云りく  
「梅おとろつる眉とあけし行そらみり  
うと道と強持来り尺せよ「予口  
ひくくとまれハ梅松とハく秋口と掩ふ  
「予ハ大く止ム



あつくり〜りつるは商量なましく吾人  
あつり〜りつるは商量なましく吾人  
あつり〜りつるは商量なましく吾人  
あつり〜りつるは商量なましく吾人  
あつり〜りつるは商量なましく吾人  
あつり〜りつるは商量なましく吾人  
あつり〜りつるは商量なましく吾人  
あつり〜りつるは商量なましく吾人  
あつり〜りつるは商量なましく吾人  
あつり〜りつるは商量なましく吾人

くは枯野の回答よりて題せんといひ口おに  
志く後よりやゆき〜〜今いつく〜ら有  
とたし〜と〜〜〜を挿し乃と  
夏にす〜と〜とつれ〜枯野ハ涼感  
されハ生草〜つ〜〜吊か友あり哭く  
他の食をおおふものあり此ハ小妻もよゆ  
空この雲もつ〜〜遠ちと〜〜水原れ  
て大は〜〜登登ハ荒河のほ〜〜と〜



ちとりに友可きるりとてうかけぬのすん  
むすんと隅田川にうらりあそび使あ  
りれけ人と矢ひりと後の誰彼も報よ  
おの霊とむと舌弾するに家足石上  
ちとりの瘦く突せ原しゆはく  
売る母はくはをふちかみくえとく  
して風推とこすれまらかマニ部にあ  
まぬ原もあるるさりまくる中に

あつりとあつとれりけなきよとさき  
のあつとてめてあそびも又ありれも

サホはあふよいマヤふ折れぬ 百梅見 仙寺

あふとあふとあふとあふと 石上

諸家の追悼あり畧し

百梅 一秩父小鹿野明題集にあり 石上 石物其書つる



近享五戊辰春

書林

江戸日本橋南一丁目  
梅村宗五郎

京寺町二條七  
井筒庄兵衛

叢桂堂藏版誂書目錄

南北新話 前篇 上下 涼帝

あゝややくり 浮葉著 友答

伊勢のはり 女山 雙飛

涼帝 独吟意の百韻 涼帝

枯野問答 全 百梅

海乃きり 全 李趙

百題集 全 百梅

さけりすと 全

いせあま島 東武 李趙

はなゆづり拾遺 雲洞

餘負 物語 續之足張 涼帝 連中

支那林 社中 一寸立 東武 桐原

無秋 穂家のやり 全 林水 蒼里

江都日本橋通壹丁目

梅村宗五郎

水戸藩  
梅村宗五郎





Blank white rectangular label on the left page.

ODO-SHOTEN  
KANDA TOKYO  
田神堂  
書堂



